

理学・工学

key word

- 生物進化
- 人類進化
- 行動生態
- 文化・環境
- 社会データ
- 人間理解
- 少子化



森田 理仁

Masahito MORITA

経済学部
准教授

【プロフィール】

専門は人間行動生態学、進化人類学。1988 年奈良県生。大阪市立大学理学部卒業、総合研究大学院大学先端科学研究科修了。博士(理学)。博士論文のテーマは、「進化から見たヒトの少子化」。京都大学大学院医学研究科、東京大学大学院理学系研究科、人間総合科学大学人間科学部、南山大学人文学部での研究員や教員を経て現職。

【主な社会的活動】

日本人間行動進化学会、日本動物行動学会、日本人類学会等に所属。ささやかな人間理解の科学研究会発起人。BS フジ LIVE プライムニュース、創造性の育成塾、心身健康科学サイエンスカフェ、Oto1 Science Front 等に協力。

【その他】

研究業績は [researchmap](#) をご参照ください。

連絡先は masahito-morita@biwako.shiga-u.ac.jp です。

【代表的な研究テーマ】

□ 進化から見たヒトの行動、生態、文化
＜生物学×社会科学＞

課題解決に役立つシーズの説明

生物としてヒトは他の動物とどのように違うのか？ もし本質的に違っているとすれば、その違いをもたらす要因は何なのか？ ヒトとは何か？ そして、人間とは何か？ 人類の進化史を軸に我々の生物学基盤と文化的特徴の両面から、このような壮大な問いに少しずつでも迫ることができればと考えています。基礎科学としての生物学・人類学から、日々の営みの中に潜む「なぜ？」を探究することができます。

ヒト以外の動物の行動の多くは、生存や繁殖にとっての有利性、極簡単にいえば次世代に自身の遺伝子のコピーをより多く残す、という簡潔な考え方により説明・予測されており、これは適応進化という現代生物学の中心的な理論の1つです。

それでは、ヒトの行動も生存や繁殖にとっての有利性で説明・予測することができるのか？ と考えてみると、そうとは言い切れないような部分もあるでしょう。この不思議(パラドックス)が私の興味の中で、主に以下の3つのテーマに取り組んでいます。青字部分は、業績へのハイパーリンクです。

【主要テーマ1:少子化を軸とした、恋愛、結婚、出生、子育て】

出生率の低下により生じる少子化(図)は、ヒトの行動の進化を考える上で非常に興味深い現象です。少子化は昨今大きな関心を集め、いわゆる人口学、社会学、経済学といった分野での研究は多く行われている一方で、進化生物学的な研究はまだ十分に行われていないのが現状です。本研究により得られる成果は、ヒトの行動の進化の解明に役立つと考えられる他、従来の少子化対策にはない新たな視点を与えることができるという公益性も含んでいて期待されます。

> 研究例:「[母親と父親の性的対立は少子化をもたらすか?](#)」「[日本人における出産の起こりやすさのパネルデータ分析](#)」「[日本における子育てへのサポートと子どもの社会的発達との関連](#)」

【主要テーマ2:進化的に(非)適応的なヒトの行動や現象の統合理解】

ヒトで観察される事象の中には、一見すると進化的には非適応的なものも多く存在します。典型例としては、出生率の自発的な低下も伴う少子化、子どもの生存や繁殖の機会を脅かす児童虐待、女性において死亡のはるか以前に繁殖が中止する閉経とそれに付随する更年期障害、自ら命を絶ち将来の繁殖可能性をなくす自殺、社会的評判や健康状態を悪くするリスク嗜好等が挙げられます。これらの進化的非適応性をもたらす諸要因の統合理解を目指しています。

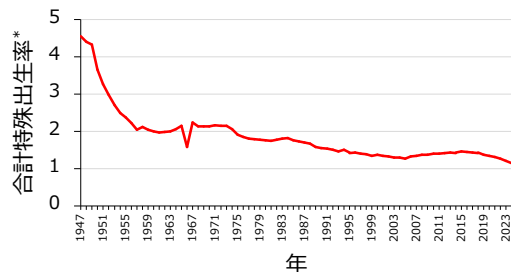
> 研究例:「[人口学的研究はヒトの進化的に\(非\)適応的な行動や現象の理解を増進させる](#)」「[進化的に非適応的な行動としての自殺\(学会発表\)](#)」

【主要テーマ3:人類のコミュニケーション様式、および文化動態】

挨拶行動の性差、言語行動と非言語行動、思春期の社会性の地域比較、人類史における音楽の進化、考古遺物の形態分析、といったトピックの研究も行なっています。

> 研究例:「[日本人の待ち合わせにおける挨拶行動の性差](#)」「[ヒトの音楽の能力と産物は複数の生物社会的特徴の人類に特異的な組み合わせによりもたらされたのだろう](#)」「[縄文土偶のウエスト/ヒップ比の三次元データ解析\(学会発表\)](#)」

【注】生物学的に「である」ということは、社会・倫理的に「であるべき」ということを意味せず、「望ましい」や「変更不可能」という結論も導きません。集団レベルでのパターンと、個人レベルでの特性が一致しないこともあります。また、進化的に非適応的とは、生存や繁殖にとって不利という生物学での意味であり、価値観を含む解釈とは別物です(ご参考: [ヒトの行動に関する進化生物学的研究と社会の関係](#))。



*女性が一生の間に産む子どもの数の指標

左の図は日本の合計特殊出生率の変化(1947～2024 年)を示しており、データの出典は人口動態統計です。出生率は戦後急激に低下し、その後は低水準が続いています。

少子化に関する要因や事情は決して一概ではありませんが、資源が豊かになり、子どもの死亡率も低下した環境において、[意図的に繁殖を控えるという行動はヒトに固有のものである](#)。

企業・自治体へのメッセージ

学部は生物学科、大学院は進化生物学の専攻の出身で、ヒトを動物の一種として見たときの我々の行動、生態、文化について研究しています。自身の専門性や文理の区分にとらわれず、さまざまな分野の方々と一緒に取り組む機会に恵まれてきました。研究で用いる手法も、既存の社会調査の統計データの二次分析、質問紙調査、行動の直接観察、考古遺物の計測等さまざまです。